

# 半世紀ぶりの歯科治療

「おはようございます」。船橋市のJR西船橋駅に近いビル四階にあるパステル歯科医院。意を決して開けたドアの向こうで明るく声が迎えてくれた。

中に進むと、受付の女性がこやかに「お待ちしております」。が、ドキドキと高鳴る鼓動が止まらない。恥ずかしながら、なんと五〇年ぶりの歯科医院通いの幕開けだ。

広い窓ガラス沿いに並ぶ治療台に自然光が差し込む。そんな光景をぼんやり眺めていると「こちらへどうぞ」と透明なガラスに囲まれた「個室」に案内された。衛生士がヒアリングする部屋だ。

ぶつちやけ「トラウマ」を話した。小学四年生のころ、母親に連れられて行った田舎の歯科医院での出来事だ。治療がとても痛かった。痛さのあまり「うーん、うーん」と声にならない声を上げていると、歯科医に「うるさくて他の患者の迷惑!」と怒鳴られた。怖かった。二度と行きたくない。

行かない……。

以来、六〇歳を迎えるまで一度も歯科医には怖くて行けなかった。おかげで虫歯で奥歯から次々と抜け落ちた。

見た目も悪く、食事にも不自由するようになった。清水の舞台から飛び下りるようなつもりで、パステルに来たことを伝えた。ネット情報でパステルが無痛治療を心がけていることを知ったことも付け加えた。

笑顔で「そうなんです。うちなら大丈夫ですよ」と応えてくれた。でも、次に案内された治療台が怖い。ドキドキは収まらない。

「やー、初めまして、こんにちは」。白いブレザー? 白衣? の権藤暁曠(よしひろ)院長。中学時代はサッカーのセンターバックだったというだけあって、体つきはごつい。が、「ま、いろいろお話しながらやっていきましよう」と意外にもマイルドな物言いだ。

「こんにちは。私が担当させていただきます」と歯切れがよく、姉御肌って感じの衛生士。さっそく二人の診察が始まった。

院長が「〇番、〇番がCで……」という衛生士が「ハイ、ハイ」

とこれも歯切れがよい。初日はレントゲンを撮り、治療方針を決め、歯磨き指導で終わった。

二日目は歯のクリーニング。衛生士が超音波と手動スクレーラーを使い分け、五〇年たまった歯垢、たばこのヤニを見事に落とす。

三日目は、わずかに残る歯根の抜歯。「今日はちよつとブルーですよね」と担当の衛生士。まったくその通り。この人は患者の気持ちをよくわかってきている、と思うと気が楽になった。

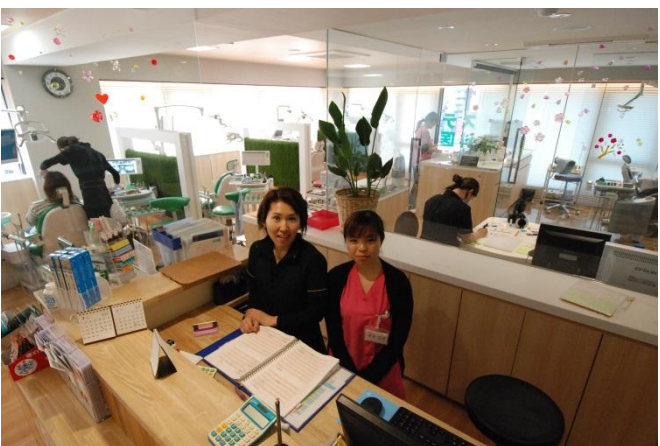
抜歯前の気持ちを落ち着ける安定剤、痛み止めの薬をもらい、しばらく待ってから院長が麻酔の注射。ネットでは麻酔のための注射が痛い、との情報もあったが、多少、チクツとしたかな?

院長が「ちよつと押される感じがありますよ」と説明。「えー」と気抜けするほど、痛みもなく簡単に二本の抜歯が終わった。最も恐れていた山を越えた感じだ。

次は上の奥歯に見つかったWS Dと呼ばれるくさび状の穴と、下の歯の小さい虫歯の治療。これも麻酔をかける院長、サポートする衛生士が専門用語を交わしながら見事な連携プレーで治療してくれた。最終段階の入れ歯の製作に入り、歯茎の形を取った後、数週間で完成した。

あれから1年余。あれほど恐れられた歯科医だったが、気がついたら治療を受け続けている。院長、担当の衛生士コンビの看板通りの無痛治療のおかげだ。

(六〇歳、男)



(上)ビフォー (下)アフター